

增加賀子代尼發句集



跋馬杣

此馬杣の跋馬杣、海へ出されし
其ハ、其ノ時、徒然集ハ、中一
子代、凡ハ、其ノ時、其ノ中、其
ハ、其ノ時、其ノ時、其ノ時、其ノ時、
關東、其ノ時、其ノ時、其ノ時、其ノ時、
其ノ時、其ノ時、其ノ時、其ノ時、其ノ時、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

緘あしをばらむるにちよしの原をよ
おもゆるに

加陽槐庵二世

大正

あ政ふと未初を



掌中千代尼発句集

春の初

業且

えりもふみまはたぐりや花のま
つたしは夏にまけりやまのま
花のまやたりのまのまのまのま
寶和よい言あうかくりたり
まやまの回毎う出まておと

まゝの葉はしるしにあらね

幸言集本也

一 友蔵とあとのとらふてのま

人日

七 幸中 慈ふもりのよくまうり

七 幸中 幸言のよのいふてのま

幸

あやらのまをまける 招きりこめ

幸言集

あはれなるまのいふてのま

いふてのまのいふてのま

あはれなるまのいふてのま

あはれなるまのいふてのま

あはれなるまのいふてのま

あはれなるまのいふてのま

11
あはれをいふにたゞしく
うらみをはりてかたじけなく
なすことばをいふはなほ
なほとていふことばをいふは
なほとていふことばをいふは
なほとていふことばをいふは
なほとていふことばをいふは
なほとていふことばをいふは

梅

あはれをいふにたゞしく
うらみをはりてかたじけなく
なすことばをいふはなほ
なほとていふことばをいふは
なほとていふことばをいふは
なほとていふことばをいふは
なほとていふことばをいふは
なほとていふことばをいふは
なほとていふことばをいふは
なほとていふことばをいふは

海苔のふんふんハ様々あり梅

梅

梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん

梅のふんふんは梅のふん

梅

青柳や花のふんふんは梅のふん
一ねとふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん
梅のふんふんは梅のふん

山野小町画賛

さきくまへりくまへり
まほやあまのまほり
あまのまほり

木芽

物のまほのまほのもの
あまのまほのまほのもの
あまのまほのまほのもの

木芽

あまのまほのまほのもの
あまのまほのまほのもの
あまのまほのまほのもの
あまのまほのまほのもの

あまのまほのまほのもの
あまのまほのまほのもの
あまのまほのまほのもの
あまのまほのまほのもの

月より出るをハルヤハハハの
ねもかりもとめぬをヤまのる
まゝるや水ぬ〜したる物ねを

條

あゝ〜腰か〜こゝろをこ〜
城〜〜や〜も〜後〜日〜あ〜
城〜〜中〜世〜の〜の〜
ま〜来〜何〜中〜か〜胡〜

あゝ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
るのりハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜

條

際るとの〜は〜あ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

野了画賢

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

よき酒一壺もて酒ハ清まり

梅

人のあふおとハたやを何さくら
は生えよりお我まての初さくら
あしをくそ酒ものあしあ梅
うまての日ハくお梅く初梅
花ちや人の酒ハ酒さくらり
白妙もいつしりくきてまの心

お近ハあつてもアえましく梅のふ
あきも花よき梅くあつて
んさよまて又おとり花戻り
こ夜にお梅くあつてまのよしの心
をさたりえんあき里の夕アハ
梅も申おのくちの梅のふ
晩清やとの心のすよしの心
朝夕もえんお梅くも梅のふ

月影もよし和様の朝むけ
山様もよしとてはまのぬもの
近よきハれハ離まじ山さくら
月をもふさく道成のまはしは
ぬとつけと情のあじや山さくら
山さくらやんえんえんよ花房り
あつとハ又あつとあつと山さくら
まのふたふものよあつとあつと

日をもおもも長し短しむくもま

餘ふ

とちむつてえ送るまを花巻

武蔵の方へ行くよ

東路の花ハあつと盛りのぬ

あつとあつと

一心よ只さつむけよあつとの花

あつと

うらふかきるの休るや非の花

梔子花

さうや見えたりんやまの志
折るやまをこしたまひて人
あはれのあまほまらやまの志
こころ里ハこまも来日や梔子
里の子のこまも白く梔子
ふのあまほまらやまの志

草

あまほまらやまの志
あまほまらやまの志
あまほまらやまの志
あまほまらやまの志
あまほまらやまの志

土草

あまほまらやまの志
あまほまらやまの志
あまほまらやまの志

九
清々としていそがしき
清々としていそがしき

晴

日初に「清々」か
清々の水もささく
清々の中もささく
清々の中もささく
清々の中もささく
清々の中もささく

おそこのあたりに

晴日

おそこのあたりに
おそこのあたりに
おそこのあたりに
おそこのあたりに
おそこのあたりに
おそこのあたりに

舞

笑ふそハく成碁なる。あゝあゝ
男よもあはる笑ひや舞あそび
舞あそびいさの。あゝあゝ

舞

あゝあゝ山ハ舞あそびの
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

舞

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

何よあるさきんきんしても
さきんきんさきんきんきん
おもしろいさきんきんきん
いふさきんきんきんきん
さきんきんさきんきんきん
おもしろいさきんきんきん
いふさきんきんきんきん
さきんきんさきんきんきん
おもしろいさきんきんきん
いふさきんきんきんきん

あつらふとくはあつらふとく

おのき

あつらふとくはあつらふとく

あつらふとく

あつらふとくはあつらふとく

あつらふとく

あつらふとくはあつらふとく

あつらふとくはあつらふとく

かたむね

かたむねにまじりて
かたむねのまじりて
かたむねのまじりて
かたむねの中

なみのり

更なる

なみのり
なみのり
なみのり
なみのり
なみのり
なみのり
なみのり
なみのり
なみのり
なみのり

おのふ

おのふハ清ぬしなるそ昔の
うのさふハ目きもちふうし

牡丹

吹了るそ風のやみぬ 牡丹か
さうこふおもとるぬれ牡丹か
若のらるる日のもさうか
枝折ハおまらしむかふるちん

杜さあ

面影のうらや果やかさつ
袖洗ふ流きさうし 杜さあ

漢 仏

帳なつりのさあもとけやふ

詩 穀多

清さハさうさうし
入ハさうさうし

竹の子

竹の子や其日のくちまはらふらふら

飾ふ

とまゆと成て千まかき遠く

美牛のねハ目あへかきうら

婦人の足娘

そくうきほまのまらりのま

いふ

雨降ぬや山うらまゆふら

雲のねハ膝まをてくまよ解る

時るたうまは幸のふおせ

たう

道くまは膝まをてくまよ解る

雲のねハ膝まをてくまよ解る

おまらまのくちまはらふら

る想え人のくちまはらふら

五

百合

娘申すや何れもよき花をば
玉の白きや紫の花のよき花

多鶴

水音ハ水子をもてしつゝ
よき花

とせ

下宿るも花のよき花をば
川よき花のよき花をば

茨

花と針のよき花をば
よき花

葛藤

藤らつてもぬらぬら
茨子あつてもぬらぬら
花よき花のよき花をば

花梅

おりのせらふもよき花をば

一

田植

田植

連よまをぬぎへくと回くりな
まの種のおすはぬもあや田植か
田植あしはも有よ通きりり
あふしはも男をけり田植うま
ふこ女やけりあ植りりしむもあ

夕息

夕影や女こゝ肌のこゝ年ととさ

田植

ふるうやあてしよあよ置の鐘
あし

あはせんハ事の水ありぬのあ
短おのたのる花や紅まさけ

田者

あうしはもあきハけりよも思ふ
まてアハきハ木様ハ木様の田者

田

能のりさしきしきしきしきしきしきしき
地宝電の如き立見きしきしきしきしき
入おし散れしきしきしきしきしきしき

名洋

うきしきしきしきしきしきしきしきしき
世説の如きしきしきしきしきしきしき
浮世と云ふ根の竹たきしきしきしき
浮世やとりおしきしきしきしきしきしき

名厚の如

名厚の如きしきしきしきしきしきしき

名あさ

流しきしきしきしきしきしきしきしき
せしきしきしきしきしきしきしきしき

名あ

ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ

おねえおのうけうと増のあ

狗塚

ねのあえうみはらすねとほり
ほりや押合たる44とあ
ほりや指くひ吸ひあう
ほりやあるあとおして路の首
ほりやあひあうねとねのあ
ほりやあひあうねとねのあ

おねえおのうけうと増のあ

送る

道もそのさよふとあ
あひさう
あひさう
あひさう
あひさう

ふ雨越の日あ山よと

ゆらゆらの道よとあー日あ山

夕立や幸よああの一いふ

あはれ

眼よささるるあはれさうそのあ

おぬを柱をすさうそのあ

あはれ

行むけはされいふあらしそのあ

送る

いづちとあ目たうあうそのあ

あはれ まうあて

親てあうあうあはれあはれあ

あはれハやあいのあはれあ

あはれあはれああいのあはれあ

あはれあはれあ

あはれあはれあはれあはれあ

鶴の古里の二喜早

おのう名持傳のそくろふ狐の
蓮の茎のうてあふすくも 鶴の

清水

山のすくも蛇の語むすふ清水の
青のよととえそ根のある清水の

鶴の籠に起し入

清くはるまのい〜い清水の

知さし〜はもは出ら〜清水の
りせ〜ま〜あよふを清水の

鶴の方へ籠ら入

おくら〜や清水の乳の〜を
はらぬ平ら

清水の〜ハ表を表もあ〜

夏の月

鶴の平の〜ヤ〜

昔ぬせしハヤクし死せしハ

あまうしとせしものせし

れきし

今世のこの世の世の世

秋の秋

たつ秋

秋の秋の秋の秋の秋

秋の秋の秋の秋の秋

秋の秋の秋の秋の秋

秋の秋

秋の秋の秋の秋の秋

朝のつらひかこしつてみる 朱田草紙

七夕

星合やふしそりその脚
かこしつてやふし吉の橋はつてをよ
藤も穂もあふや星のまひより
こころのまのまのこころ

文月やふしよまふくしんもあふ
文月のまふくしんもあふくしん

まよふる

多う海の花や木陰のおもふ
まよふやふしつてあふの影もあふ
あふ白やふしつてあふの影もあふ
あふ白やふしつてあふの影もあふ
あふ白やふしつてあふの影もあふ
あふ白やふしつてあふの影もあふ
あふ白やふしつてあふの影もあふ
あふ白やふしつてあふの影もあふ
あふ白やふしつてあふの影もあふ
あふ白やふしつてあふの影もあふ

画如真

乳白の巾又ある時ハ起さくし

稲妻

いさつあや稲のまきよつれり

稲妻の旗をぬきまやあの上

いさつあや何ふまきよつれり

夏の花

たきくめあの上まきぬ花せり

川春の日はハきくくくまのせり

想ふ

秋のせりやまきとあるま成るぬま

よつれりまき散舞中まきのせり

夏のせりやまきよつれりぬま

夏

下流のせりあきよ道のぬま

月送るよ目のまきぬまぬま

あゝさくら

千秋城咲むさくらんやさきの春

花

秋風のりつちよつたさる尾花

晚篠ふいらくつ洗む尾花

さくら

日影くさ道ハはくさのやち

画賛

雉子のはま原「さくら」

子種貝の歌

波のくさ秋の咲あり子種貝

せう みるまのこいさ

うーあーの種を子種を二見

画賛二章

草写くさ風の拾ふや捨小ふね

芦の枝あすすくね尻とちうり

桔梗 廿九

桔梗のふ笑時ホトと云さしれ
刺 葉のく

ハ花と云く葉よハねきと花のふ

鷓鴣双花

鷓鴣ハやくてもの子て青
鷓鴣ハ万ことと云ハ根よ甚い

西瓜

くくくハもの云は西瓜外

秋 風 虫

木々ものハつと云ハ秋のくセ

水よ出て水よハくくハ秋のくセ

秋のくセハつと云ハ秋のくセ

中のと目よハくくハ秋のくセ

中のと目よハくくハ秋のくセ

秋のくセハつと云ハ秋のくセ

月

名月やらふ押合ふとうの流
名月やたふとくもくねのうた
名月やきくふくもふあのみ
名月やきくふくもふあのみ
名月やきくふくもふあのみ
名月やきくふくもふあのみ
名月やきくふくもふあのみ
名月の船やあそこもこもあそ

三十一

名月やきくふくもふあのみ
伏見のあそび

名月の船やあそこもこもあそ
画賛二章

名月やきくふくもふあのみ
名月やきくふくもふあのみ
名月やきくふくもふあのみ
名月やきくふくもふあのみ
名月やきくふくもふあのみ
名月やきくふくもふあのみ
名月やきくふくもふあのみ
名月やきくふくもふあのみ

三十一

時をわたりて各月のえんをおこし
るの月いりててててててててて

硯の歌

各月やうのくくもえくる丸
硯の山画資

各月や雪をゆかして石の音

荊口をくくくくく

各月の歌くくくくく

あさ甲あは

月をえくくあははのあはは

十六夜

いさよひのやあはあはあはあは

十六夜や海くくくくく

いさよひのあはあはあはあは

十六夜の名あはあはあはあは

十のあやいさよしと云果ぬらち

初冬

初丁やさくすんよる夜もすまら
まらふらやもさくすくしてあつたなり
はら丁や山へ登れハあまおきん
初丁やまぐくしてすハおー

鶯

少人の目の色移らうらうら

鶯あし針のこあらう鶯うま
あつたれも秋をア子もね鶯外

蒲萄柿

きやくときもあわさむふとらあ
ねてまふさみくえし時

菊

菊のりあ初て人の老ふりり

いふ事もなほまゝのまゝに
あつたやうに思ふは
ふたふたのうらみ
あつたやうに思ふは
ふたふたのうらみ
あつたやうに思ふは
ふたふたのうらみ
あつたやうに思ふは
ふたふたのうらみ
あつたやうに思ふは

師の思

いく事もおもひの
あつたやうに思ふは

あつたやうに思ふは

草花

あつたやうに思ふは

海月

あつたやうに思ふは
あつたやうに思ふは
あつたやうに思ふは
あつたやうに思ふは
あつたやうに思ふは
あつたやうに思ふは
あつたやうに思ふは
あつたやうに思ふは
あつたやうに思ふは
あつたやうに思ふは

歌

夕暮の身ハ持ふるし秋の風

之思峰ふ

百生や憂一まじしのふよと

一瓢菴子て

九十九をともふる持ふる瓢外

と為銘

おち秋や目ましく水の忍ろしと

おと秋

夕暮の身ハ持ふるし秋の風

之思峰ふ

百生

一瓢菴子て

九十九

をともふる持ふる瓢外

と為銘

略 進言

略 たりやと云ふの事いふかたき事かたき

事いふ

百と云ふの事日も略のゆかりあり

事いふ

此秋やとて事いふに異なり

此秋やとて事いふに異なり

冬 の 歌

時 句

時 句 ころおん舟のり 時 句

和 時 句 ぬもぬかぬぬぬぬぬぬ

時 句 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

時 句 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

時 句 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

三十一

三十一

帰花

遠くも果もくもあり歸り
花の敷の多ふて帰花
さうさ

さふさふしらさふ表おれてさふさふ
那待のさふさふさふさふさふ
さふさふのさふ

清くくくくぬものおちる外

枯尾さふさふさふ

根ハ切て極さふさふ枯尾さふ

安ん

とれくくも風さふさふさふ枯尾さ

大根引 さふ

るくさのさふさふおもし大根引

降もの根とさふさふさふさふ

さのちりくさ中根ハさふさふ引

残名 火燈

待ももも 櫻もあそび 残名 うき
是もたての 花の 念もあうり
尾もあうり 時

花もあそび 花の 障もあそび 火燈
龍は 師の 横もあうり 火燈

鴨 三十三

池の 鴨もあそび 火燈

花もあそび 花の 念もあうり

水仙

水仙もあそび 花の 念もあうり

香

香もあそび 花の 念もあうり

香

香もあそび 花の 念もあうり

若くはしるふとてふるやうに記すべし

境

さうしてしるふとてふるやうに記すべし

終 扣

山をいふは清きことよかや針たき

好 拂

りふとてふるやうに記すべし

山 業

若くはしるふとてふるやうに記すべし

若くはしるふとてふるやうに記すべし

若くはしるふとてふるやうに記すべし

豆加

如實助於平山春撰

月夜やふきこゝろあるまの由

乙由の方へあきしるる端よ

ふ咲ぬまの想ひよきし柳

よあふはあはりの時

晴の陰のうらみかきかき

晴の陰のうらみかきかき
よあふはあはりの時
ふ咲ぬまの想ひよきし柳
乙由の方へあきしるる端よ
月夜やふきこゝろあるまの由
如實助於平山春撰

あまのついでにともめて時々の
あまのついでにともめて時々の

浄土のついでにともめて時々の

浄土仙女

ふたのきぬきとすまひのついでにともめて時々の

わらわのついでにともめて時々の

はくまのついでにともめて時々の

後のついでにともめて時々の

つるつるのついでにともめて時々の

全

垣のお櫃のあとさうらうら
 花のついでにともめて時々の
 風はついでにともめて時々の
 軒のついでにともめて時々の
 鏡飯のついでにともめて時々の
 暖のついでにともめて時々の
 類のついでにともめて時々の
 鳥のついでにともめて時々の

代

全

仙

全

代

全

仙

全

了の耳もなきの巻の刊
 いのくちややすらふ十二
 杉のまや一枝の枝打戸
 時ハ今ぢふささるさ月と花
 丁まな名流の能流たやら
 仕舞^{ニラ}の史煙の階成やうき
 娘子押ふかくれと一
 糸物ちぢくると流の流さて

代 全 仙 全 代 全 仙 全

こくを流のくちう日の
 るよき成流てすくしきの
 階階くの神ふきの流瓜
 文巻の料紙も月もゆくと
 まくさの糸の流るもま
 流るも片山を流るもた
 ける子細く天定をめぐ
 流るも流の流るもま

代 全 仙 全 代 全 仙 全

おまゝくハ叔父さまも山子も頼
 けしハ縁成塔工地あり
 太もたらうと地帯の念ふよめ
 晴てきくしるのこみけ
 おえしちまら夕魚の流れおち
 ちやまら口のよまあるのまき
 伊成えハ人月おまの火女帯
 きよしるをいそぎるの月

仙 全 代 全 仙 全 代 全 仙

庚辛子印しおハ何事ともおぼえ
 麻ハ丸とよる尾まて満し
 別合の花の咲日ハ待せたる
 笑みこくともやすむまは
 ニラ
 塔まらめくませは舞の音あり
 夕日あらしる苗の背戸
 龍舟の意よかやうとくまつく
 格まらよつらる。福のまじく

仙 全 代 全 仙 全 代 全 仙

思はけらうし原きめりこ子
 村らうとうり昔蒲るんあう
 まのりうらう鏡のあう張あう
 我彈琵琶は海あうりいと
 村あうの鏡となうらう山おろし
 茶と浦はあうと十の夜の月
 條粟の、ねく、昔る麦の花は
 何あうりの秋のあうの紫花橋
 仙 全 代 全 仙 全 代 仙

世はまよきうもさうんあうのち
 鏡酒器のあうおとらうく
 下さうらう白妙の線きえて
 笑いし月あうる花のあうき
 あうのあうはまよきうとらう
 せうきうとせうのこ月
 仙 全 代 全 仙 全 代 仙

子代女

麦林

ふの名のまゝなまかりふのまゝ

ふのまゝと日親もあぬふれ 千代

ふのまゝのまゝのまゝとまゝ 蒼葉

これまゝと持ふ雨まゝ 風二

栗林の目下の門はまのまゝよ 東棠

まゝのまゝの人まゝハ近よる 乙峯

ふのまゝもまゝ合まゝのまゝ 代

え三六のまゝのまゝのまゝ 林

灯のまゝのまゝのまゝのまゝ 二

杜子のまゝのまゝのまゝのまゝ 山

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ 峯

ねのまゝのまゝのまゝのまゝ 棠

五三九

二

發行者

池

善

平

石川縣金沢市南町三十五番地

發兌所

天

章

閣

定價十八錢

三

50

